

筑後川水系の特徴と課題

大河川での治水対策

- ・ 日本有数の暴れ川「筑紫次郎」と過去の水害
- ・ 上流域の風倒木と下流の高潮災害

都市や地域を支える高度な水利用

- ・ 福岡都市圏等への水供給と頻発する渇水

多様な生態系と河川空間の利活用・今も残る歴史的河川構造物

- ・ 有明海に注ぐ重要かつ代表的な河川
- ・ 多様な河川空間の利用
- ・ 治水、利水に貢献した伝統技術や歴史が数多く現存

九州一の規模を誇る流域と盛んな流域連携活動

- ・ 九州の4県から成る流域
- ・ 流域の活性化を図る流域連携活動

筑後川における現状、特徴及び課題

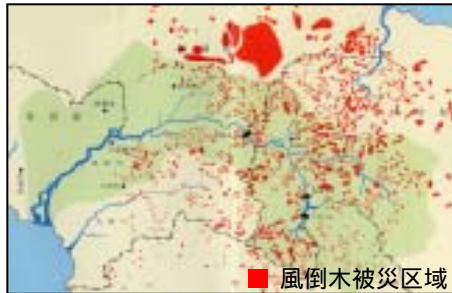
大川での治水対策

・日本有数の暴れ川「筑紫次郎」と過去の水害
(昭和28年6月洪水)

凡 例	
被害箇所	■
氾濫区域	■



・上流域の風倒木被害状況



松原・下笠ダム風倒木流入状況
(平成5年6月)

スリットダム風倒木捕捉状況



平成3年9月に発生した
風倒木被害



人を乗せたまま流れ出した小森野橋



壊滅的な被害を受けた厚狭温泉橋



水没する地蔵1作宮住宅



濁流が渦巻く日笠管内

・下流の高潮被害状況



昭和60年8月台風13号
による高潮で浸水被害
が生じた地域

昭和60年8月31日:台風13号浸水状況



昭和28年6月洪水概要

久留米市等に甚大な被害をもたらした戦後最大の洪水

(推定流量 約9,100m³/s荒瀬地点)

【被害】

・死者 147名

・家屋被害計 約108,300戸

・被災者 約54万人

計画規模の洪水を安全に流下させるための治水施設の着実な整備

風倒木被害

・平成3年9月台風19号

上流山地部で大量の風倒木が発生

被災面積 約20,000ha

風倒木本数 約1,500万本

平成5年6月洪水により大量の風倒木の流下

橋梁等の改築

情報伝達等、危機管理体制の強化

(風倒木監視センターの設置)

高潮被害

・昭和60年8月

浸水戸数: 2,004戸

高潮堤防整備の推進

筑後川における現状、特徴及び課題

都市や地域を支える高度な水利用

高度な水利用

・筑後川の水は導水等により流域を越え広域的に利用されている
 上流部では発電による利用が多い
 中流部では農業用水による利用が多い
 下流部は筑後大堰から広域的に導水(上水、農水)



頻発する渇水

・筑後川沿川では慢性的な水不足が生じている

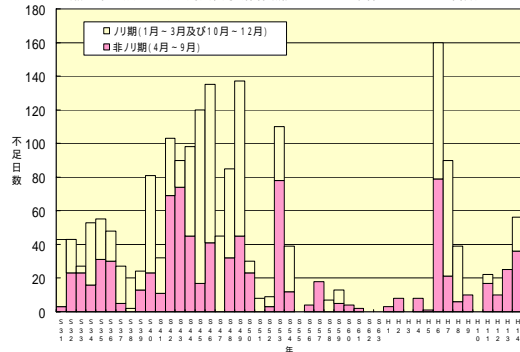
近年の主な渇水状況

年	地域	取水制限等期間	日数
	代表都市名	期間	
昭和50年	福岡市他	S50.10.17～S51.1.30	106日間
昭和53年	福岡市他	S53.5.20～S54.3.24	287日間
平成6年	福岡市他	H6.7.7～H7.6.1	330日間
平成7年	福岡市他	H7.12.23～H8.4.30	129日間
平成11年	福岡市他	H11.2.25～H11.6.26	122日間
平成14年	甘木市	H14.7.11～H14.10.10	92日間
	福岡市他	H14.8.10～H15.5.1	264日間

河川環境等への影響

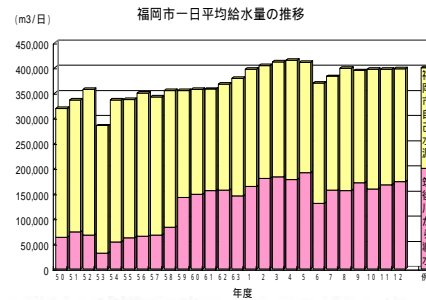
・利水安全度の低下や不特定補給施設の整備の遅れにより、河川流量の確保が満足に出来ない状況である

瀬の下地点における河川、海域目安流量40m³/sを確保できなかった日数



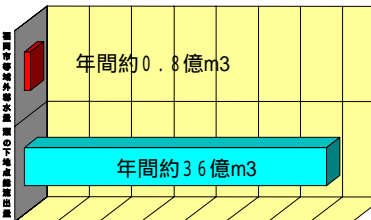
福岡都市圏等への水供給と頻発する渇水

・福岡市水道の一日平均給水量に占める筑後川からの導水は4割を越えている



・福岡市等の流域外導水量は、筑後川瀬の下地点総流出量に対し2%程度である(平成13年度までの10年間の平均)

瀬の下地点総流出量と流域外導水量の比較



・6/11～6/20の間においては松原ダム弾力的管理試験により対応している

渇水時の筑後川中流恵利堰流下状況 (推定河川流量約3m³/s)



弾力的管理試験により松原ダムから1.5m³/s補給時の恵利堰流下状況 (推定河川流量約2.0m³/s)



高度な水利用

・筑後川の水は、発電や農業用水等で繰り返し使用されている。

・筑後川の水は、福岡都市圏など、流域を越え広域的な水利用がなされている。

・江川、寺内、合所ダム及び筑後大堰などの水資源開発施設を進めてきた。

頻発する渇水

・筑後川流域は近年少雨傾向にあることから利水安全度が低下している。(2年に1度の渇水調整)

水資源開発施設の整備

河川流況改善のための不特定用水補給施設の整備

- ・既存ストックの活用
- ・新規施設

適切な情報提供と円滑な渇水調整

多様な生態系と河川空間の利活用・今も残る歴史的河川構造物

・多様な生態系を有する汽水域



・有明海に注ぐ重要且つ代表的な河川

筑後川が注ぐ有明海は、干満差6mで日本一

有明海や汽水域に生息・生育する生物等



・多様な河川空間の利用



・治水・利水に貢献した伝統技術等



多様な生態系を有する汽水域

・筑後川汽水域は、我が国最大の干満差を有する有明海の湾奥に位置し、そこに流入する河川特有の環境を形成。
 ・アイアシなどの塩生植物群落が分布
 ・日本では有明海に注ぐ河川にしか生息していないエツ、アリアケヒメシラウオやムツゴロウ、シオマネキなどが生息
 ・カササギやハマシギなどの鳥類にとって、採餌及び休息の場として欠くことのできない貴重な環境となっている。

貴重な自然環境に配慮した河川整備

多様な河川空間の利用

- ・筑後川リバーサイドパーク
- ・三隈川の鵜飼いと屋形船(日田市)

市民の憩いの場としての利用等に配慮した河川整備

治水・利水に貢献した伝統技術等

・荒籠(あらこ)
 舟運のための水深確保をはじめ、護岸等多くの目的のため設置。

・デレーケ導流堤
 流路固定することにより、本川左岸側に土砂の堆積を防ぎ、航路確保が目的。(本川河口から早津江分派まで約6km)

筑後川における現状、特徴及び課題

九州一の規模を誇る流域と盛んな流域連携活動

九州の4県から成る流域

筑後川流域は、熊本、大分、福岡、佐賀の4県12市37町7村から成る。



筑後川リバーツーリズムの実施



菱の実ちぎり体験



木の皿づくり体験



カッパマネー

流域の活性化を図る流域連携活動



NPOが発行する「筑後川流域新聞」と季刊誌「筑後川」



筑後川フェスティバル



小中学校を対象とした総合学習支援

筑後川の流域連携

・福岡、佐賀、大分、熊本の4県からなる九州最大の河川。

・地域連携を深めるためのネットワーク組織の中核として「NPO筑後川流域連携倶楽部」が平成11年に設立。

(主な取り組み)

- ・筑後川まるごと博物館(学芸員養成)
- ・流域新聞、季刊誌の発行
- ・小中学校を対象とした総合学習支援
- ・リバーツーリズムの実施
- ・森林への植林活動
- ・河川清掃活動 等

市民と一体となった流域管理
河川を活用した地域活性化

(筑後川フェスティバル)

筑後川流域の活性化や、上下流の人的交流等を通じて筑後川に関わる住民の活力を増進するための催し。

・持ち回りによる開催も流域内の主要自治体をほぼ一巡。H14で16回目の開催

(カッパマネー)

筑後川流域で生み出されるモノやサービスを取り引きする筑後川流域専用通貨。筑後川流域連携倶楽部が主催するボランティア活動に参加すれば貰える。

基本高水のピーク流量と計画高水流量

基準地点	荒瀬
基本高水のピーク流量	10,000 m ³ /s

検証

流量確率から 8,300 m³/s ~ 10,400 m³/s
昭和28年6月洪水の推定流量から、
約10,600 m³/s

以上から、現計画を踏襲

計画高水流量	6,000 m ³ /s
--------	-------------------------

正常流量

夜明において、かんがい期でおおむね35m³/s ~ 40m³/s程度と想定されているが、河口部のノリの養殖、汽水域の生態系等についてさらに調査・検討の上、決定する。